

音楽科

音楽科における創作活動の授業実践

—幼・小・中一貫校の特色を生かした旋律づくり—

末 廣 麻 由 子

A Study on Teaching Practice of a Creative Activity on Music Education -Creating a Melody in Attached School from Kindergarten to Junior High School-

Mayuko Suehiro

The purpose of this study was to develop music classes to enable students to acquire the knowledge and foster the ability to think and make decisions through a creative activity. Taking advantages of attached school from kindergarten to junior high school, researcher set the goal of the lessons for “creating a melody on favorite picture books of pupils to catch their fancies more”. Students gradually acquired the knowledge and skills, through activities to catch the intonation of words in the picture books individually or in a small group and to create a melody for the pupils to sing more easily in terms of its rhythm and tone. Since the students carried out these activities with imagination of the pupils to have fun with the melody, students’ attitudes towards creating a melody got higher. As a result, the lessons were effective because students enjoyed creating the melody, developed their knowledge and skills and built up logical thinking and judgement. Still, the lessons left a problem; the lack of the basic knowledge the students should have acquired. (p.195-200)

1 問題の所在と研究の目的

これまで歌唱・鑑賞・器楽が中心だった音楽教育だが、近年の音楽教育においては、「創作活動」が少しずつ注目されてきている。「創作」の分野は一から、音やリズムを操作しつなげ、構成していく活動である。感覚や感性だけでは成り立たず、知覚・感受したことを「創作活動」につなげるためには「知識」が必要不可欠である。これまでに音楽の授業で鑑賞したこと、または日常生活の中で触れている音楽が基盤となって歌唱・器楽分野にもまして、思考力・判断力が必要となってくる。また、表記された音を正しい音程で歌うことができる生徒ばかりではないため、創った音を出す機器や技能も必要とされる。さらに歌唱や器楽、鑑

賞のように、一つの教材に対して全員が取り組むのではなく、40人いれば、40通りの音楽が創作されるため、個々の能力の差に加え授業構成の難しさも課題となる。音楽の授業全般に苦手意識がある生徒や、漠然としたイメージで「難しそう」という先入観を持っている生徒も多い。実際に6月にアンケートを実施した際も以下のような結果となり、創作活動が好きと答える生徒は非常に少なかった。

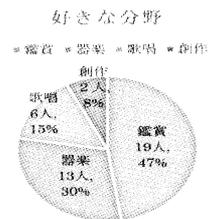


図1 5月実施アンケート結果

指導者自身も学生時代に歌唱・器楽・鑑賞をした経験はあっても「創作」を経験したことのある指導者は少ない。このように創作活動には課題が多くある。その反面、知識を身に付け技能を鍛え、思考力・判断力を育成するためにはとても有効な活動であると考え。また、新教育課程では学力の三要素の一つである「知識・技能」が他と等しく重視される見込みである。感覚や感性だけではなく、「知識・技能」が磨かれることにより感覚や感性もより深いものとなっていくと考える。

本学校園の通教科的能力（キャリアプランニング能力、人間関係形成、課題対応能力）と関連的に育む音楽科の本質に根ざした資質・能力の育成を考えた時にも「創作活動」はすべての資質・能力を網羅できる取り組みであると考え。

そこで本研究では、音楽の4つの分野の中の「創作」に重きを置いて研究を進めることとする。

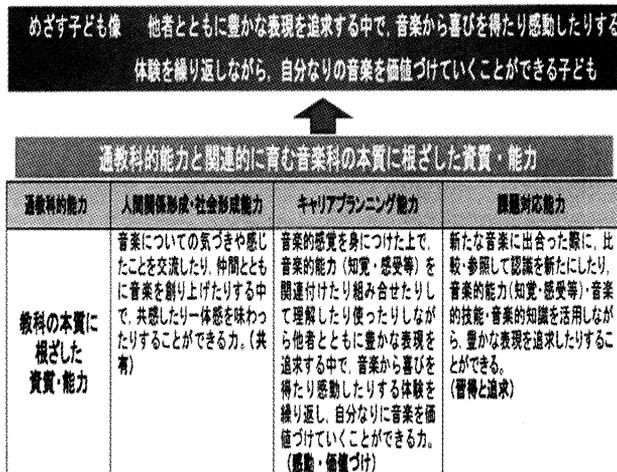


図2 音楽部会 研究構想の概要

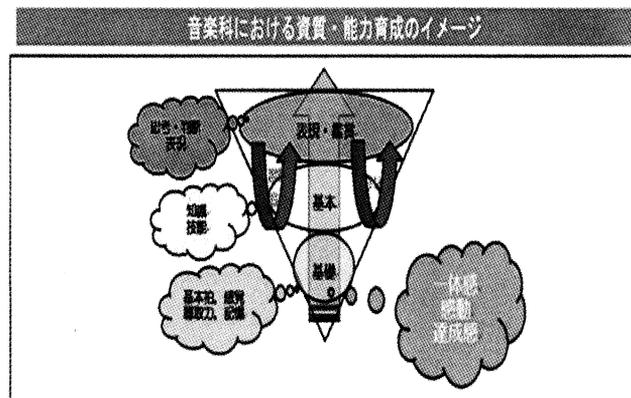


図3 音楽科における資質・能力育成のイメージ

2 研究の方法

(1) 対象児

広島県内の中学校1年生1クラスの子ども40名を対象に調査を行った。小集団の数は10グループであり、各小集団の人数は、4名構成であった。同じ編成で6月に日本音階(ドレミソラド)を使って4人1組で2部形式(AA'BA')16小節の旋律創りをしている。一人4小節ずつ担当して2部形式を完成させた。この際はリズム譜で記譜し階名を記していく方法を取り、創った旋律をリコーダーで締め太鼓のお囃子をつけて表現した。

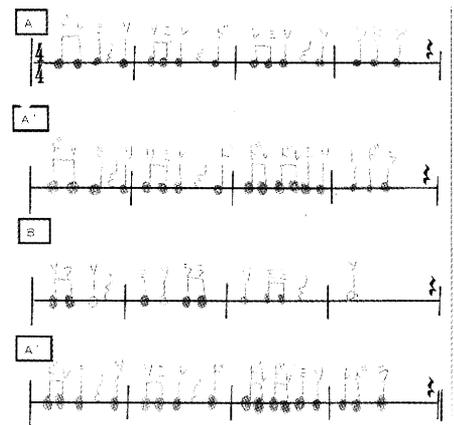


図4 日本音階を使った16小節の旋律創りの生徒のワークシート

この取り組みをした結果、創作活動に対するイメージに少し変化が見られた。

「創作」について

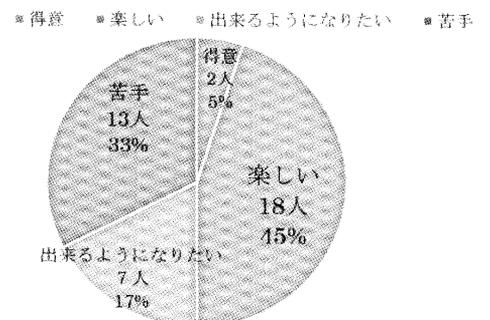


図5 7月実施アンケート

(2) 調査時期

10月下旬から12月下旬にかけて2ヶ月間調査を行った。

(3) 授業構成

授業計画は次のとおりである。

第1次 絵本に旋律をつけよう (3時間)

第2次 創った旋律を表現してみよう (1時間)

第3次 園児さんが好きな絵本に旋律をつけよう (4時間)

第4次 創った旋律を表現しよう (1時間)

(4) 授業の概要

「赤とんぼ 作詞者 三木露風 作曲者山田耕筰」の歌唱活動に取り組んだ際に言葉には「抑揚」というものがあり、「赤とんぼ」は言葉の抑揚に基づいて音程がつけられていることを学習した。

その後、「だるまさん シリーズ かがくいひろし」という絵本を題材に使う言葉の抑揚やリズムを考えて音を付けた。この絵本は文字数が少なく、「だるまさんが」という同じフレーズが何度も出てくるため、リズムや音程を付けやすく、同じ文字数でも様々な旋律のつけかたがあることを互いに学び合うことができ、多様な表現方法を知ることができる。このシリーズの本はイラストにもユーモアがあるため、幼児にも非常に人気がある本であり、生徒も「読んだことある」「持っている」「なつかしい」などと認知度が高い。

だるまさんが	どてっ
だるまさんが	ぷしゅ
だるまさんが	ぷっ
だるまさんが	びろーん
だるまさんが	にこっ

以下のような手順で旋律創りに慣れていった。

- ①言葉の抑揚を探る。
- ②言葉とイラストに合ったリズムを考える。
- ③抑揚を参考に音程を考えリズムと組み合わせて五線譜に記譜する。
- ④できた旋律を交流する。

⑤アドバイスをしして修正していく。

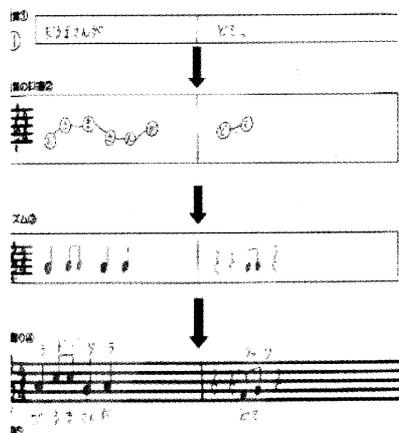


図6 「だるまさんが」に旋律をつけた生徒のワークシート①

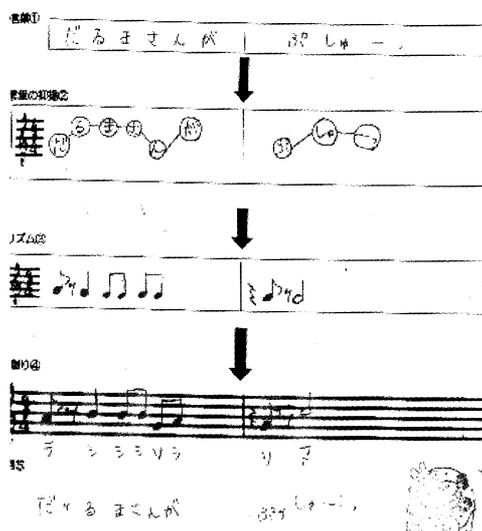


図7 「だるまさんが」に旋律をつけた生徒のワークシート②



図8 手拍子でリズムを考えながら旋律作りに取り組む生徒の様子



図9 リコーダーを使ってイメージに合う音を探す生徒の様子

同じ絵本を選択したグループが互いに創った旋律を相手グループを園児と見立てて披露し合った。

- ・自分たちが創ったリズムを他の班の人たちに披露して、そのリズムや歌い方についてコメントをもらい改善点分かった。その改善点を直すためにもっと時間を上手に使うって良いものを作りたい。
- ・歌い終わったあと、拍手がもらえて、園児さんが喜んでくれる姿をイメージできて良かった。自分たちが思わなかったようなリズムや音程があったので面白いと思った。
- ・他の班のを聞いてみて、いろいろなリズムや音程があってびっくりしました。いろいろ学ぶことが出来て良かったです。

上記の生徒の感想文のように互いに披露すると様々な表現の仕方を知ると同時に、表現が豊かになっていき、提示していなかったリズムを使ったり、#（シャープ）を使ったりなど、オリジナルな旋律が増えた。



図10 生徒が創った楽譜①



図11 生徒が創った楽譜②

その後、隣接する幼稚園に園児に人気のある絵本を調査しに行った。幼稚園教諭にいくつか紹介してもらったなかから、「電車でいこう 間瀬なおかた」という絵本を選択し、目標に向けて取り組んだ。電車が走る音や同じフレーズの部分をまず個人で考え、電車で走る音をリズムや音程を班で考えた。



図12 絵本の中で何度も出てくるフレーズを個人で考えた時の楽譜

「だるまさんが」シリーズで一つの曲を作りあげ、披露できたことが少し自信になり、個で作曲することに抵抗感が減り3小節の課題を全員こなすことができた。

最後に文章の部分を班で考え、それらを組み合わせる3グループで1冊の絵本に旋律を付けた。同じフレーズや電車が走る音から先に旋律をつけていき、季節ごとに変わっていく言葉に旋律を付け、3つの班で1冊の絵本に旋律を付けた。



図 13 音を出しながら確認の様子

絵本のイラストも意識しながら音の高低を考えたり、電車が走る音を休符を使い表現するなど、何度も修正を加えながら園児が喜んでくれることを目標に旋律作りを行った。適宜生徒の作品を例に様々なパターンを提示しながら旋律作りを苦手としている生徒に手立てをしていった。



図 14 生徒に例として示したスライド

3 結果と考察

始めは抵抗感があった生徒も時数を重ねるにつれて自分で旋律を作ることに喜びや楽しさを感じだす生徒が多く見られた。特に自分がイメージし

た音の流れや音程を班に1台ずつ用意した32鍵盤のミニキーボードを使用し班で意見を交わしながら見つけ出す作業にやりがいを感じていた。



図 15 音楽が苦手な男子もキーボードで音を出しながら確認する様子

○生徒の振り返り

- ・初めは何からすればいいのか分からなかったけど、まずは例をお手本にしてまず作ってみて、「この音のほうが好きそうじゃない？」とか話し合っていることができ、旋律創りをすることが楽しかったです。
- ・最初は旋律を初めから作るのには難しくて自分にはできないと思っていたけど、やってみてたくさん旋律を作ることができた。
- ・仲間と協力したらここまでできるんだなと思いました。
- ・出来たときは嬉しかったけど、そのあと本当に園児さんが喜んでくれるかが不安でした。すごく達成感があり、「よかった」「楽しかった」と思いました。そしてほっとしました。班の人へありがとうと思いました。
- ・味わったことのないものすごい達成感あり、もっと作ってみたいと思いました。
- ・自分たちで曲を作るのは難しかったけど、音符についてももっと興味が湧きました。いろいろな楽譜を読みたいです。

多くの生徒が「そんなことできない」というイメージを持っていた旋律創りだが、「園児さんへ」という目的があったため、苦手に立ち向かい、仲間と協力しながら音を探し、記譜を行った。仕上がるイメージが湧かなかったことができた時の達成感が大きく、次の意欲に繋がり、肯定的評価も増えた。

また、作曲をするにあたって使う音を特定しなかったが、「園児さんに」という目的があったため、園児が歌いやすい音域、リズムを選び、自分たちで音を特定しながら、作曲することができた。



図 16 生徒が創った楽譜

作曲が楽しいと感じた。	18人
難しいイメージだったが案外できた。	18人
「もっとやりたい」と思った。	10人
なんとなくできるようになった。	19人
やっぱり苦手で、作曲の方法の理解が出来なかった。	5人
苦手だが出来るようになっていきたいと思っ	9人

図 17 図 16 が仕上がった後のアンケート結果

4 結論と今後の課題

個または小集団で絵本の言葉の抑揚を探り、園児が歌いやすい音程やリズムを考えながら旋律作りを行うことで、少しずつ知識や技能が身に付いていった。園児の喜ぶ姿をイメージしながら旋律を作ることで、創作意欲が高まり、創作の楽しさや喜び、達成感を味わいながら、知識・技能を鍛え、思考力・判断力を育成するために有効な取り組みであった。目的意識やゴールが明確ではないまま苦手意識の強い創作活動を行うよりも、自らがたどってきた道のりを今生きている「園児」という対象の設定も効果的だったと考える。8割程が本学園の幼稚園に通った生徒であるため、披露する時のイメージもしやすいという本学園の特色を生かすことができた。また「誰かのために」という目的意識は生徒のやる気を喚起させることができた。

生徒自身が記述した足りない力

- ・困ったときにすぐ人に頼ってしまいますところ。プリントをしっかりと見て歌っているリズムと同じことを書きたいです。
- ・発想力。同じような旋律ばかりでもう少し工夫できたと思う。
- ・音符の長さの理解が足りないと思う。作る時にもよく迷った。

今後の課題としては、上記の生徒の振り返りからも読み取れるように、基礎知識の定着不足である。音符や休符の長さ、音名で読む力など、身に付けておくべき基礎的知識の定着不足が課題といえる。頭の中にメロディーが浮かんできたり、口づさむことはできたりしたとしても記譜をする力が乏しく、4分の4拍子の意味を指導する所から始まる。その点は「リズム遊び」などで体感しながら定着を図る必要がある。

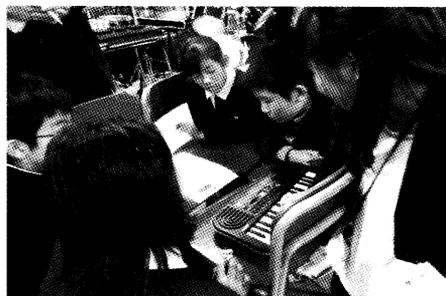


図 17 生徒が表現した歌と楽譜が違う点を
実演してみせ、考えている様子

研究を通して、創作活動は関心・意欲、表現の創意工夫、表現の技能、鑑賞の能力の4つの能力が総合的に必要であることが改めて分かった。その一方、4つの力が総合的に必要だからこそ、本校が育むべき通教科的能力の育成も十分に見込めると考える。今後も創作活動を授業の中で積極的に取り入れるとともにそれを見通して基礎能力の定着も図っていきたい。